

大雨に対する営農技術対策

令和4年(2022年)8月9日
留萌農業改良普及センター

8月8日から9日にかけての大雨により、建物、ほ場への浸水、冠水等の被害が一部に見られます。被害を最小限にとどめるため、以下の対策を進めてください。

共通項目

- 1 明きよからあふれ出た雨水は、明きよの下流に流れるよう工夫し、ほ場内での滞水を極力回避する。
- 2 ほ場内部の滞水は排水溝や畦畔を切る等、速やかにほ場外に排水させる。最も低い部分に穴を掘り縦浸透させ滞水部分を最小にして、作物への影響に配慮する。
- 3 河川の水位は、降雨後に上昇することがあるので、気象台や河川管理者が出す最新の情報に基づいて、十分に安全を確認し、事故防止に努める。

1 水稲

- 1 泥流や土砂が流れ込んだ水田では、溝切りや明きよを施工し、土壌の乾燥を図る。
- 2 崩れた畦畔や土砂で埋没した用排水路・水口は、水が引いた後、速やかに改修または補修する。また、用排水路の草刈り及び水路内のゴミ上げを行い水の流れを確保する。
- 3 ほ場内に流入した異物やゴミ等がある場合は、収穫作業等に支障がないように除去する。

2 畑作

1 麦類

- (1) 部分的な倒伏は、竿等を活用し穂の部分が早期に乾燥するよう作物体を起こすなど品質低下防止に努める。
- (2) 全面倒伏やそれに近い倒伏であっても、穂の部分の早期乾燥化に努めるとともに、収穫に当たっては、健全小麦との混麦を避ける。

2 豆類

- (1) 小豆及び生育の遅れている大豆は、排水後ほ場に管理作業機械が入れるようになったら、速やかに深耕爪を使用した中耕作業を行う。
- (2) 追肥は、豆類のその後の生育状況を観察し、落葉・退色程度により判断する。
- (3) 大豆の斑点細菌病・小豆の褐斑細菌病は、少発生のうちに抜き取りを励行する。
なお、本病の汚染拡大防止のため、中耕・除草作業は晴天時に行う。
- (4) 小豆では炭そ病の発生が懸念される。防除ガイドに準拠して薬剤散布を行う。菌核病については開花後から防除を行う。

3 畜産

1 飼料作物

- (1) 新播草地などで冠水により表土が流失した部分が大きいほ場は、8月下旬頃までにイネ科牧草の追播を早めに行う。

2 飼養管理・衛生管理

- (1) 乾草、サイレージ等の飼料は、泥や雨水による変敗がないことを確認して給与する。大雨の影響を受けたロールバール等は、利用可能と判断できるものでも早期の利用に仕向ける。
- (2) 浸水した畜舎では、速やかに排水対策を実施するとともに、雨水がひき次第、伝染病や乳房炎などの発生を防ぐため、汚染部分を水洗し消毒剤や石灰の散布、石灰乳塗布を行う。
- (3) 牛の体調を確認して、異常牛はすみやかに獣医師の診断を受ける。